

松 山 大 学 論 集
第 21 卷 第 5 号 抜 刷
2 0 1 0 年 3 月 発 行

祝島集落研究からみた“社会環境システム”

——“学際・業際の眼差し”からの序説的論考——

森 保 洋 之

祝島集落研究からみた“社会環境システム”

——“学際・業際の眼差し”からの序説的論考——

森 保 洋 之

1. は じ め に

私の所属する「環境学部」は、平成5年（1993年）4月に、日本で最初に設置された学部で、グローバルな観点から、環境の保全と創造について教育・研究を行っている学部である。私の専門分野は、建築計画、都市計画で、両者の狭間に専門領域を置いており、建築・都市計画、地域社会計画が専門分野と云え、「狭間の計画論」が、私の課題認識の基本である。

さて、この度、青野勝廣先生のご退職に際する「記念論文集」への寄稿の機会を頂いた。青野先生とのお付き合い・交流の切っ掛けは、学会活動としての「(社)都市住宅学会・中国・四国支部」の設立発起人、支部長・副支部長同士であり、12年をこえる係わりである。その間、この学会の2回の全国大会を、それぞれ大会実行委員長として責任ある立場を担ってきた。実は、青野先生は、経済学の分野、私は、建築・都市計画の分野が専門である。異なる組織機関の場合、一般に専門的には、こうした分野同士の交流の機会は、なかなか得難いものの様に考える。しかし、この「都市住宅学会」は、学際・業際の諸分野からのスパイラルアップを目途に置いた「スケールの大きな意図」を持った学会であることが、この様な分野同士の出会いを用意してくれた様に考えている。その後、青野先生とは、同席の機会が多く、その都度、沢山のことを学ばせて頂く機会を頂いた。これらが基底に流れ、今日のお付き合いのカタチが形成された様に考える次第である。

この「記念論文集」への寄稿の内容については、率直に云って、当初、悩みの中にあつた。しかし、次の事に気付いたことから、一気に、論考に入ることになった。それは、青野先生と、都市住宅学会の業績賞審査の役を互いに務めた時のことであり、都市・商店街再開発に係る対象地に共に赴き、相互に議論を行い、その後、メール交信を行った際のことである。その時の議論の根底に、「マネジメント」という事柄があつた様に、私には思えたのである。そこで、ここでは、学際・業際の学びからの眼差しの点で、一つの重要課題と云える、その「マネジメント」に、スポットを当てて、論考、それも小論考を行い、これをもって、寄稿論文とさせて頂くことにした。その内容については、この8年程、継続的に実施してきた、殊に、都市住宅学会・支部の見学会が、私を祝島に誘ってくれ、その後も多くの係わりを持たせてくれた、つまり、この学会と関係の深い、「山口県・上関町の祝島」における集落研究を取上げ、この機会に、その軌跡を記録・整理し、それを通して、「住宅地マネジメント」に係わる論考を行うことにした。具体的には、集住環境の構成原理追究の眼差しを重視し、「住宅地マネジメント」に係わる「社会環境システム」を構想する序説的論考を意図した。そして、こうした考えを基本に、継続的に、地・学連携型で進めてきた、“祝島集落”を対象事例とする「集落の構成原理追究」の結果から見えてきた「社会環境システム」に関係した「モノ・コト・仕組み」について、主に、参考文献(1)と(2)を用いて、考察することにした。

2. 本論考の前提と検討の枠組み(仮説)

ここでの内容の最終的な目途は、恐らく、地域環境関連の課題の発見・認識・解決であるが、余りにも広範囲故に、私の専門分野の一つである、「地域社会計画」の視点から、特定の地域・集落事例を対象に考察することとした。ここでの「地域社会計画」とは、①行政域、②河川流域・里山・里海ほかの環境域(バイオ・リージョン)、③コミュニティ、等々の「3種の地域・場」に関する社会的環境関連の課題と、その改善・育成の計画を意味するものとす

る。また、その立場から、この小論考では、「集住環境の構成原理追究」の眼差しを重視し、「社会環境システム」を構想する序説的論考の機会とした。ここで、その「社会環境システム」とは、地域社会計画に根ざして、自然環境、物的環境、社会的環境、及び、これら全体のシステムの理解を基本にし、その上で、対象とする環境を、「創り」「育み」「守る」と共に、それら相互の関連づけ（絡み・係わり）の検討を行い、その仕組み・方策・制度（呼称：社会システム）等々を得ることと、ここでは定義しておきたい。

今までの私共の各種の集落研究の結果より、集住環境の構成原理追究の立場からみた、「社会環境システム」の概念を考えると、その基本とは、自然環境（ベース）＋物的環境＋社会的環境であり、また更に、これら全体のシステムの理解である。ここでの「自然環境」とは、土地（含、起伏）・水・日照・風・気候等々、「物的環境」とは、地域・集落の形成に関わる空間構成要素と、その絡み（係わり）、「社会的環境」とは、生活組織・祭事ほか、人間の共同生活の総体、人間の集団としての営みや組織的な営みをいうこととし、「これら全体のシステムの理解」とは、これらの相互の絡み（係わり）（含む、主・従関係、同格・同等関係、サステイナブルな仕組み、ほか）を云うこととする。

3. 事例としてみる“祝島集落”の「社会環境システム」、その“モノ・コト・仕組み”

既に示した通り、集住環境の構成原理追究の立場から、私の研究室では、この8年程、継続的に、地域と大学との連携型（「地・学連携型」）で、山口県・上関町“祝島集落”を対象事例とし、集落の構成原理追究の研究を行ってきた。その結果、見えてきた「社会環境システム」に関係した事項、“モノ・コト・仕組み”について以下に示したい。

3-1. 「祝島集落」研究・プロジェクト」の経緯

3-1-1. “祝島集落”の特徴

この集落の特徴としては、離島であること、激しい自然条件（特に、強烈な風雨時への対応・北斜面故の日照確保への留意・ほか）にあること、大分県・国東半島の伊美別宮社の神職が、4年に一度、報恩感謝の意味を込め祝島集落で奉納する、海を渡る神事“神舞（かんまい）”と云う、1,000年をこえて行われてきた神楽奉納の集落行事があること、2列の石の間に土を入れて、軒先まで積み重ね、道側の土部分に漆喰を施す“練塀（ねりへい）”と呼ばれる珍しい塀とも壁とも云えるものがあり、それが、隣家にも繋がりをみせて、云わば「練塀通り」と云える様相を呈していること（私は、これと家々とが織り成す一纏りの形式を「路居（ろきよ）」と命名した。）、等々が挙げられよう。また、近年の状況という視点からは、人口減少、高齢者コミュニティ化、祭事コミュニティとその維持困難性、「路居」空間と中間領域の豊かな存在、その存在の確認からみた保全への課題、NPOほかの集落内・外の活性への期待、限界集落へのカウントダウン、それを避けるための措置・支援・勇気付け・具体施策の提示・提案、等々が、具体の課題であろう。（資料1）



資料1 祝島の特徴（神舞：左，練塀：右）

3-1-2. 約8年に亘る「祝島集落」研究・プロジェクト」の経緯
本経緯としては、次の通りである。

- ① “祝島集落”の調査研究…2001年8月5日から現在まで、約8年間の内容…
- * 集落の状況認識：人口把握，その人口減少，高齢化が極端化している集落，農・漁業並存，練塀とその通り化，超高密・共用空間型集落，格子型で無く起伏順応型の道構成，神舞（神楽），等々が特徴の集落。
 - * 研究の特徴：徹底した“フィールドワーク・ワークショップ型”。地域（住民・行政）と大学（教員・学生：現役・OB）の連携型（協働型）。
 - * 研究の内容：当集落に関して，「自然・風土・歴史」，「生活組織・祭事（ソフトシステム）」等々との絡みから，「集落の構成原理（ハードシステム）」の追究。「空間論」「生活論」から，「計画論」，そして更には「制度論（含，マネジメント論）」への進展・深まりを意図しての研究展開の重視。
 - * 研究成果公表：日本建築学会，都市住宅学会¹⁾，広島工業大学紀要，ほかに多数掲載。中国・北京の国際シンポジウム（招待講演）²⁾ほか，にても公表。

- ② “祝島集落”の練塀修復プロジェクト支援…2006年11月からの1年間，そして今年も…

祝島集落の練塀の傷みが目立ってきた。そこで，練塀修復の提案を致した。その結果，次の活動に繋がった。

- * 「練塀フォーラム」：講演会，研究成果展示：2007年1月21日開催・講師として参加。これは，実質的に，以下の第1次の練塀修復ワークショップの開始宣言的なイベントとなった。
- * 「練塀修復ワークショップ」：以下の通りである。

[第1次]：2006年11月（実質2007年2月2日）から，2008年3月までの間で実施。

修復・実績：「練塀通り」の一面：延べ距離：約300m，平均高さ：約1.5

練塀修復プロジェクトの様子 (橋部氏:祝島フォト情報HPより)



2007年2月20日 練塀修復プロジェクトの様子



2007年3月4日 練塀修復プロジェクトの様子

■ 2007年9月30日：練塀修復作業完了。当初の予定面積のおよそ4倍の修復を達成。
【修復成果】延距離：約 300m、高さ：平均 1.5m、延面積：約 450m²、参加：ボランティア 300名。

資料2 練塀修復ワークショップの様子

m, 延べ面積：約 450m²,

述べ参加者数：約 300 名。(資料2)

[第2次]：今年2009年8月22日(講演会：企画・参加・支援)・23日
 (“練塀”修復ワークショップ：企画・参加・支援)【実施済】

■ “練塀”修復に関する講演会

- 1) 祝島集落“練塀”修復プロジェクトと、その第1次修復結果の報告(橋部好明氏)(資料作成支援：広島工大：森保研究室)
- 2) 講演1：「土壁への取り組みと土壁見て歩きー世界の版築・練塀を尋ねてー」(畑中久美子氏)
- 3) 講演2：「祝島集落の魅力と今後への期待」(住田昌二氏)
- 4) 第2次祝島集落“練塀”修復プロジェクトの計画概要と、今後の“練

堀”修復ワークショップの日程・ほか（橋部氏），（支援：森保，ほか）

■ “練堀” 修復ワークショップ

- 1) 第2次“練堀”修復プロジェクトと、当日の“練堀”修復ワークショップの概要（橋部氏+畑中氏）（支援：住田氏，森保，森保研究室：西岡・佐々木）
- 2) “練堀”修復作業（ワークショップ）
 - …約20名で、「練堀通り」の入口部分の約20mの練堀を修復した。…
- 3) 第2次の中の今後の予定（橋部氏，支援：森保，ほか）
 - …今後，当面，港近くの50m以上の練堀を修復したい。…

[第3次]：随時開催・展開【今後計画】



資料3 水産庁「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選」の中の5つに選定された2集落

（注）伊根町の舟屋群の写真：ホームページより掲載させて頂いた。

③ “祝島集落”の魅力付け，保全・再生支援…2006年2月から，現在・将来も？…

本項に関しては，以下に示す通りである。

- 1) 水産庁「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選」：2006年2月22日に資料提供支援：全国の百選に選定された上で，その内の5選に選定された。…今までの私共の研究成果が，本選定の幾ばくかのお手伝いになったとのこと，私共として，嬉しい限りである。(資料3)
- 2) 「都市住宅プロジェクトへの視点：祝島集落保全プロジェクト（第1回～第4回）」：都市住宅学会・機関誌に連載。その第3回：版築ワークショップからの学び（略題）：森保・畑中久美子氏が執筆。その第4回：祝島集落研究の意義（略題）：住田昌二氏・森保が執筆。(2007年4月から2008年5月までの間の連載。)
- 3) 祝島未来就航プロジェクト：2008年5月11日，講演会講師として支援：住田昌二氏+森保。【参考】祝島未来就航プロジェクト：農水産業を基幹産業とする経済的，精神的に自立した地域づくりを実践するため，祝島にて，2年前に住民自体が立ち上げたもの。次世代に引き継ぐに値する「一流の離島」と云う目的地を目指す。航海するのは船に見立てた「祝島丸」，そして島民一人ひとりが役割を担う船員と云う想定。
- 4) 空家活用プロジェクト支援：【検討中】(岡山・倉敷：植村 徹氏に，港近くの古民家（農家）再生の呼掛け済み)…休憩機能，喫茶機能，資料展示機能，トイレ，等。他に，合宿機能，等々も検討の予定。…
- 5) 定住人口確保（新・居住者増強，ほか）支援：【検討中】(特に若い世帯の転入居住支援，ほか)
- 6) 集落の機能向上・生活支援：【検討中】(健康性・安全性・利便性・快適性・等々の確保，救急医療性の確保，高齢者医療・福祉介護支援，ほか，等々について，更なる充実に向けた検討)
- 7) 産業振興（産業化支援）：【検討中】(地域の農・林・漁業等の振興，後継

- 者問題対応，観光用の農・林・漁業体験，みやげものの開発，ほか)
- 8) 文化財化支援：【検討中】(伝建地区？ 登録文化財？ 柔らかい町づくり施策支援(「歴史まちづくり法」ほか)？ 等々，検討中)
 - 9) 祝島集落と他の島嶼集落との交流事業：【進行中】⇒広島県・宮島地区との交流：2008年5月，宮島集落：町家通りを考える会・会長(当時)が祝島へ，2009年2月，祝島集落：町衆2人が宮島へ，というカタチで，相互交流がスタートしている。
 - 10) 都市と農・漁村との連携・交流：【検討中：一部実施済み】居住体験者確保⇒定住人口確保に繋がる，ほか。具体的には，見学会，居住生活体験(子供・大人)，新・生活スタイルの確認，地域生活・文化の大事さ確認，相互交流，各種提案・支援，他地域への広報，ほか。【実施済み事業】⇒某NPO主催での講演会にて講演：2008年5月26日，その中で，交流イベントの開催を提案。その結果，2008年10月5日に，そのNPO主催での祝島見学会(含，地元との交流会)を実施済み。
- ④瀬戸内の島嶼集落への展開…2008年度から，現在・将来も？ …(前項の9)を受けて展開)
- 1) 市域，県，地方を越えた文化の確認。瀬戸内集落の見直しの必要。海洋文化の見直しの必要。つまり，「環」瀬戸内海への地域環境的な展開の重視。祝島集落の集住形式・研究スタイルの応用・展開。まずは，3つの集落での展開：「祝島」「宮島」「第3の集落？」を構想。今後，更に他集落へ展開を意図。
 - 2) 前項，1)を受けて，広島工業大学・共同研究機構内にプロジェクト研究センター：「地域・集落計画研究センター」を設置(センター長：森保)。瀬戸内の島嶼集落の現状を分析・考察し，活性化する手立てを探ることを意図。その発会式を，平成21年2月16日(月)に，宮島にて開催。特別顧問：住田昌二氏，橋部好明氏ほか，メンバー多数参加。

3-2. “祝島集落”研究から考える《新たな公》への眼差し

—新たな認識：「組織論」「空間管理論」—

これについては、参考文献(3)から、一部を抽出し、再掲、及び多少加筆して以下に示したい。

【1】2008年度の日本建築学会研究協議会資料集(農村計画部門)への寄稿依頼の際に、次のコメントが添えられていた。それは、本研究協議会では、農村における新しいガバナンスとはどのような組織が想定されるのか(組織論)、また新しいガバナンスは地域空間を如何に管理すべきであるのか(空間管理論)など、様々な視点・切り口から議論したいと思う—と云うものであった。こうした「組織論」,「空間管理論」の立場から、祝島集落研究をベースにして、以下に、少し整理して見たい。

【2】認識：《新たな公》は、新たなコトを起こす源流になろう。《新たな公》は、組織論として重要である。特に、まちづくり・住宅地づくりに関連した「仕組み・方策、等の面」で、《新たな公》が大きく関係して来よう。殊に、「住宅地マネジメント」は、重要な観点になろう。

【3】大きく考えた場合、今までの、「生活論」「空間論」「計画論」等々に加えて、「制度・政策論」「組織論(含、人的管理論)」「空間管理論」、等々は極めて大事であり、今後は更に重要な位置を占めることになるだろう。

【4】《新たな公》の「組織論」に関して、先ず基本的な《新たな公》のメンバーについては、地域のヒト、行政側にいるヒト、企業側にいるヒト、そして学生もメンバーであろう。行政側のヒトも個人として参加すればよい。《新たな公》としてのメンバーの組み合わせについては、大きく、①「民と公の合体型(この中には、民主体型、公主体型の二つがあろう。)」,②「民と民の合体型」、更に③「公と公の合体型」の三つが考えられる。ここでは特に②の例として、以下のものを考える。“地元の組織とその町衆”,“祝島での田畑の開墾や分与等々の仕組みとしての株やトウド(資料6の備考欄を参照)等の仲間内の生活組織”,“地元の中での組織同士,組織横断的な住民連合”(例えば、地元の祭

り組織とその地域支援の地域開放系 NPO との協働型の《新たな公》、等々は先ず以って考えられよう。つまり、“個人から NPO, NGO までの広範囲さ”が、ここでのメンバー像であろう。

【5】《新たな公》の「空間管理論」については、大きく見て、“地域空間を役割区分すると言うより、地域空間全体を重層的に管理する。”ことが考えられる。このことは、集落の空間構造のシクミの解明から、関連する施策の方向として考えることが出来よう。超高密な集落の場合、共用空間の管理は一つの重要な管理対象である。少子・高齢、限界集落、等々の地域課題に対して、《新たな公》が大きく機能することも、当然に考えることが出来る。

【6】祝島集落では、各種の《新たな公》の多様な実践が既にあると見てよい。また、集落空間全体を重層的に管理し、更に、各種の共用空間について、共に使い、共有の空間としての意識をも醸成し、空間管理まで発展する（前）段階の集落と見ることが出来よう。次いで、この集落では、■自然や生活シーン等々から遊離しない、生きた集落としての集住原理追究。⇒狭義の「モノづくり」計画技術から、よりソーシャルな際（きわ）を極めようとする広義の「モノ・コト・仕組みづくり」技術への変化の必要。■空間構成のみでない、ハードとソフト両面についての細部にわたる眼差し。■各種の専門分野の技術を動員し、これらの総合化を図り、総括的・実務的な技術分野とする「プロジェクトエンジニアリング性の確保・重視」。■一つの大学研究室の活動を越えた住民・行政との協働性を有する活動としての「プロジェクトチーム化＝タスク・フォース化」の重視。⇒チーム性：大学・研究室側＋地域側＋他多数。■少子高齢化の波が極端化している島嶼部、限界・危機的集落にならないための集落への支援（地域おこし性）。等々は今後大事にしたい方向である。こうした中において、《新たな公》の存在は、日増しに、そして静かに大きくなるものと思う次第である。当然に、他の集落に対しても、その意味するところ、まさに大になるものと云えよう。

3-3. “祝島集落”研究からみた「社会環境システム」

3-3-1. “祝島集落”研究の形式

祝島は、半農半漁の海に臨んだ集落でありながら、漁村型ではなく農村型の集落である。このような独特の集住形式をもつ農村型集落の「稠密性」の原理追究を行った。具体的には、自然・歴史・文化が敷き重なる祝島の地層を読み解きながら、「路居」をキーワードとして集落の空間構成原理を解明しようとした。具体的には、祝島集落について、「自然環境（起伏・風・日照・気候等の風土など）」をベースに、「物的構成」と「社会的構成」を見る図式にて見てきた。勿論、中心は、集落の「物的構成」であるが、これについては、「路居」の形成に関わる空間構成要素」を主に見てきた。研究が進むに連れて、これら集落の「物的構成」については、祝島の場合は特に、「自然環境」と「社会的環境」とを、時間軸を入れつつ、総合的に見ないと、読めない！ 語れない！ということが、研究を進める中で、集落から教えられたことの様に感じている。「社会的環境」については、生活組織（惣・講・株内・トウド・ほか）と、祭事（神屋・神舞・ほか）等々に注目したのである。

3-3-2. “祝島集落”の「社会環境システム」、そのモノ・コト・仕組み

①集落空間の構成原理の基礎的理解

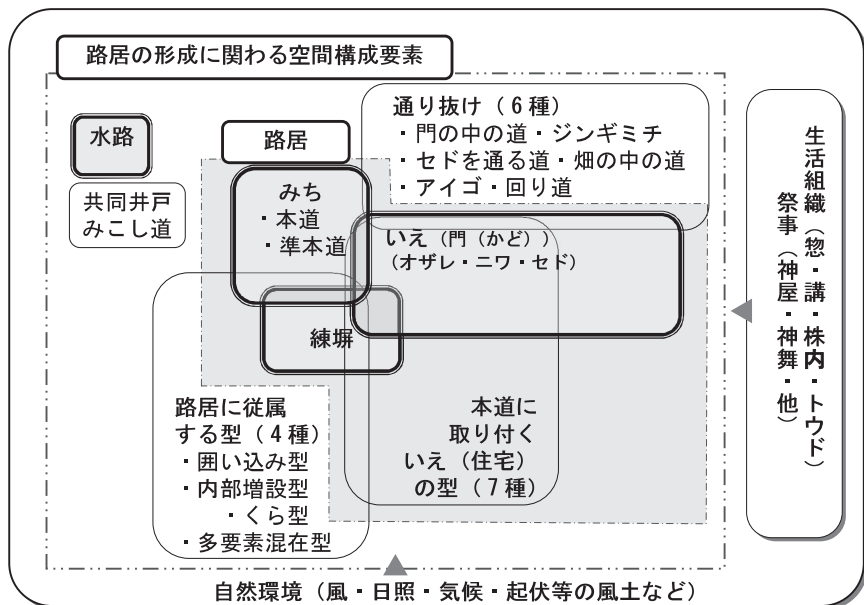
集住環境の構成原理追究の立場から、この8年程、継続的に地域と大学との連携型で進めている「祝島集落」を例に、その集落の構成原理追究の結果見えてきた「社会環境システム」関連のこと、モノ・コト・仕組みについて以下に列挙したい。

- 1) 集落は、島嶼部特有の風には練塀で防ぎ、家は北斜面であるので天窓・高窓を開ける他の工夫を行いながら日照を得、全体的に起伏に順応している。（注：本論考において、「家」とは、物的な住まいと、その周りの空間を意味するものとしている。）
- 2) 生活組織のうち、「惣・講・株内」は、集落の形成を大きく下支えしたも

のと考えられ、更に、「路居」の構成のネットワーク性の基盤となる「空間の共的利用」を可能にしたものと理解することができる。また、「神舞」も、このことに有用な働きをしたものと推測される。

- 3) 自然環境を基盤として、風、日照、起伏等の気候・風土に順応し、かつ、路居の構成のネットワーク性を有する集落といえ、祝島集落は、まさに、環境共生型の家・通り（路居）・まちのカタチが存在している集落と考えることができよう。

等々が得られている。(資料4)



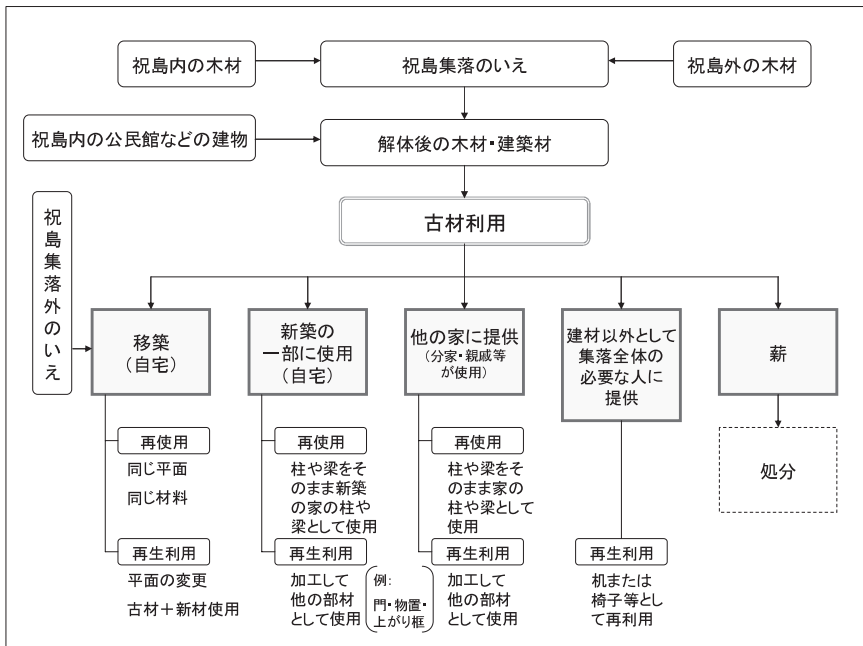
資料4 生活組織・祭事と空間構成要素の枠組みからみた路居の形成に関わる空間構成(各種の中間領域、共的空間に係る空間要素として、通り抜け：6種、家回り：4種。)

②集落空間の構成原理, その解釈

★祝島集落の構成原理（枠組み）の意味すること、つまり、全てが段階的というより、起伏等に順応しつつ、相互が関係性の中にあるという意味で、「ネットワーク的」に組まれていることについては、我々の研究の成果・解釈に対して、協働的に研究を行っている祝島住民の町衆の方の言による、つまり、「集落全体が、云わば、一つの大きな屋敷のようである」との表現に、まさに端的に、その特徴が示されている。

★その意味では、『いえは部屋、みちは廊下、みこし道（集落外周路、他）はいえの周りの道。』、そして、『集落人は家族。』と解釈することができよう。

★まさに、『祝島集落は、環境共生の条件を十分に備えたムラ』、そして、『“家・通り・まち”の空間形式を具現化している集落』と考えることができる。



資料5 祝島集落での古材利用の状況

3-3-3. “祝島集落”におけるサステナビリティ・システムへの想い

- 1) 祝島集落においては、島嶼部故に、自立性が求められ、住宅の廃材処理が難しいことによる「住宅の古材利用」における“家”の持続性、石と土でできており、壊しても再度使用可能な塀とも壁とも見られる「練塀」や、その練塀が道に沿って連続する「練塀通り」における“通り”の持続性、

備考	持続性の対象	持続性の内容	継続
家	*1 住宅の作り方	大工+(トウド)+集落全体で造る。	大工のみ
	*2 住宅の木材	使いまわす。	△
	*3 住宅の間取り	受け継がれる。	△
	*4 田畑を開墾	トウドが組まれて造る。	×
	*5 田畑の農作業	トウドが組まれて伝承される。	△
通り	*6 田畑までの道・水路	トウドが組まれて造る。	×
	*7 練塀の造り方	トウドが組まれて造る。個人でも造る。	石工のみ
	*8 練塀の材料(石・土)	何度も使える。(壁型:塀型よりも石材多し)	○
	*9 練塀と災害(火災・台風)	人家や通り(まち)を守る・維持する。	○
	*10 練塀の規範性	練塀が連続する。練塀通り化する。	○
	*11 練塀の修復	保全・維持される。	○
まち	*12 株の組織	受け継がれる。	△
	*13 惣の集落全体の意識	みこし道(集落の外周路)等によって伝承される。	△
	*14 講での連帯感	行事・祭事によって伝承される。	△
	*15 区の自治組織内の意識	行事・祭事によって伝承される。	○
	*16 トウドの共助共縁	技術が伝承される。共同性意識が醸成される。	△
	*17 寺・神社	宗門戸(門徒)によって信仰意識が伝承される。	△

注) 継続 ○:現在も行われている。△:一部行われている。×:現在は行われていない。

資料6 祝島集落における家・通り・まちの持続性に関する対象・内容

(備考) トウド:田畑開墾・ほかの相互の労力提供(使役)。トウドは「田人」と表記される地域もあるが、祝島では漢字で表記せず。一般的に言われる結(ゆい)と同様のもの。「株内」の範囲でトウドが組まれる場合がある。

株:ある範囲の土地の開墾許可をもらい、数人で協力して開墾する形態をいう。開墾した土地を分与する主体を株の本家といい、株の本家と、土地を分与された複数戸の分家を総称して「株内」という。この中には同時に、親戚関係の本家と分家も存在している。開墾した土地を本家が分家に分与することを「株分け」と云う。

講:冠婚葬祭を共助共縁で行う単位のひとつであったと考えられる。講の内部は、連帯意識により結合していたと推測される。講は村の神社や寺での各種行事により結合したと考えられる。

更に生活形態である、相互扶助的な集団の「株」、そして、その他の「惣・講」等における“まち”の持続性、等々が、特に注目される。そこで、それらを中心に、祝島集落の現状を把握し、持続性に関わる要因を抽出し分析を行っている現状である。

- 2) 現段階で得られている、祝島における持続性の要因として、離島である自然の厳しさに下支えされた、次の6つが列挙できる。つまり、①モノを大切にしている意識を持っていること。②トウド（一般の結（ゆい）と同様のもの）等の共助共縁で技術が伝承されること。③家、通り等を集落全体で実際につくり、保全・維持してきたこと。④空間に対して共同性意識（コモン意識）があること。⑤その仕掛けとして、株・ほかが存在し、生活上機能してきており、物的なモノを持続させるために、社会的な組織が大きな意味をもつこと。⑥以上、これら全体が相互に絡んでいること。等々が強く窺えた。この様なサステイナビリティ・システムを、まさに持続的にするためには、その仕組み自体の正確な認識、そのための方策・制度化の裏付け（バックアップ）、等々といった「社会システム」の形成が必須のことと云えよう。（資料5、資料6）

3-3-4. “祝島集落”研究の「社会環境システム」としての意義・拡がり
まちづくり、住宅地づくりに関する「マネジメント」の観点から、本項について考察すると、以下の事項を重視することが宜しいものと考ええる。

- * 物的成果目的型研究のみの観点からの脱却・乖離。
- * 一定の完成系の「絵」を求めた段階から、時間性の確保。プロセスプランニングの必要。
- * 狭義の「モノづくり」計画技術から、よりソーシャルな際を極めようとする広義の「モノ・コト・仕組みづくり」技術への変換の必要。
- * 空間構成のみでない、本家・分家、生活組織、祭事、等々を含む眼差し、つ

- まり、ハードとソフト両面についての細部にわたる眼差しの必要。
- * 各種の専門分野の技術を動員し、これらの総合化を図り、総合的・実務的な技術分野とする、プロジェクトエンジニアリング性の確保。
 - * 道と敷地の間にデザインコードを検討する、道と敷地の間を緩やかに、そして曖昧にする、等々のデザインの対象としてみるプロジェクト性の重視。
 - * 道に沿い練堀が連続する“通り”という認識による「練堀通り」化の理解、つまり、「路居」の確認、その居住者側の理解・表現・応答の表れ。
 - * 一つの大学研究室の活動をこえた住民・行政との協働性を有するプロジェクトチーム化（タスク・フォース化）の必要。
 - * 開始から終了まで、目配せ・支援する統括者としての、プロジェクトマネージャーの必要。
 - * 開発事業としての地域・集落研究（プロジェクトマネジメント性の重視）。
 - * 計画事業としても、一括り性（ワンセット性）があり、「プロジェクト」の一つとして位置づけることが可能。単なる調査研究から、企画論、運動論としての、新たな出口・風を示す、研究プロジェクトの新しいスタイル性。
 - * 少子高齢化の波が極端化している島嶼部、限界・危機的集落にならないための集落への支援、地域おこし性。
 - * 平面・空間づくりの型、供給システムの型、等々の「型研究」中心の計画技術研究から、それに併せての学際・業際を重視する特定地域・集落支援型研究への止揚。
 - * 専門家各位の専門領域から、少なくとも身近な対象・範囲への、まさに自由な拡大・展開への期待。そうして、前項の趣旨を含めての、一人一地域・集落研究（身近な地域・集落対象の研究）の奨励。

4. お わ り に

持続性ある環境体としての「祝島」は、「社会環境システム」として見る格好の事例である。今後、更に「経済的環境」や「政治的環境」等々の他要因、

例えば、次に示す要因、等々の深めた検討も必要である。

- *産業構造の再確認：殊に、1次産業の重視。
- *「公」・「共」・「私」のまさに入り組んだ集落、それが祝島集落であり、「共」（中間領域）の空間・機能の意味・意義を確認し、守り、創り、育てるための方策の模索・提案。
- *デザインから求められることとしては、「路居」の概念の検討の重視である。このことについては、「スケルトン・インフィル」の原義である、「サポート・インフィル」という「建物づくりの概念」を、「住宅地・まちづくりへと応用・展開」する。このことについて大いに検討要す。道と敷地の間にデザインコードを検討する、道と敷地の間を緩やかに、そして曖昧にする、等々の検討が必要であろう³⁾。
- *住宅地マネジメントにおける行政の役割として、アーバン・メジャーに光を当てるのみで無く、ローカル・マイナーな課題認識の重視、自然的・物的・社会的な環境の織り成す枠組みの重視、等々に基づく、更に小規模な特定地域・集落事例の調査研究の奨励、等々に基づく、仕組み・方策・制度（呼称：社会システム）等々の提言が、それも《“幅広で柔軟な、応用・展開可能な、今までの各種施策の狭間を埋めるような” 諸施策提言》が求められる。

以上、本論考で記した内容は、「“祝島集落”研究・プロジェクト」の研究内容から、ここでの課題認識に係る事項を抽出致したものの、それらを“やや並列的”に示した結果となった。今後、これらの諸事項の総体を、立体的に構造化し、それを明確に提示することが必要と考えている。それにより、ここでの本来の用途に、更に接近することになろう。そうした構造化の結果提示については、別の機会に譲ることにしたい。

5. 今後の課題（追録）—建築と都市，その伝統と近代の狭間を考 える基本的課題—

本論考の目途とする課題は、近代社会の基本的課題の一つであると考えている。このことに係る幾つかを、追録的に考えることにしたい。ここでは、特に、i)「建築」と「都市」の概念付け、ii)「伝統」と「近代」の概念付け、iii)「建築」と「都市」の狭間、iv)「伝統」と「近代」の狭間、v)以上の全体への眼差し、等々を列挙することにした。これら夫々の説明は割愛するものの、以上のことと、「持続と発展」を含めた狭間について抽出した課題に関して、以下に、まさに追録的に示すことにしたい。

- ①「グローバルな課題」の一つとしての“近代化の功罪”：近代化、例えば、近代デザインは、長所だけでは無いことを認識すべきであると考え。それは国際化を進める反面、地域性・場所性を、ややもすると軽んじるという短所があり、結果として、夫々の自然・地域特性・地域材・生活様式に配慮しないデザインが優先されてきたものと云えよう。私的には自らの仕事への反省も含めて、“近代化の功罪”について検討する必要があると思う。
- ②「第1次産業」の再評価：近代化の功罪のもう一つに、第1次産業を置き去りにして来たという課題がある。具体的には、例えば、農・林・漁業等々の生業、農・漁村等という形態、等々を、後回しにしてきた感が強いということである。「第1次産業」の再評価と、その環境整備を行うべきであると強く考える訳である。物質的に「豊かに生きる」だけではなく、人として精神的にも「よく生きる」ことの大事さを確認し、そうした環境整備を目指すべき時期に、グローバルには（世界は）、来ているものと考え次第である。
- ③「都市と農村」から「都市と郊外」への図式変容：②の故に、「都市と農村」という図式は、「都市と郊外」という図式に変容し、都市、都市近郊・郊外、都市“遠”郊外、という図式を生んだ。このうち、都市“遠”郊外は、結果

的に、課題多きエリアになっているのが実情と思う。このことは、「都心」、「農村」等々の存在（あり方）の検討を、留保した結果と考える次第である。

- ④「建築」と「都市」の狭間：「建築」により「都市」はできる、「都市」は「経済活動」によりできる、「都市」は「生活都市」、等々、「建築」と「都市」の狭間について、多くの自由な議論があった。各都市で、大いにそうした議論を、立場・イメージ・生活様式の異なる人々が、自由に行うことは意義深いことと考える。そうした議論には、全ての人が納得できる結論は、恐らく得られないものの、それは、皆が自らの都市・地域を構想する時の、一つの重要な通過儀礼であり、多くの人々に、“止揚”を考えることの大事さを確認させる羅針盤的な機会・内容であり、多くを教え、確認し合う好機にもなるように思う。何よりも、先ずは、同じテーブルに着くことが、大いなる目途への一点突破の要件であろう。
- ⑤「伝統」と「近代」の狭間、その“遺伝子（DNA）”としての理解：例えば、都市内の新たな建築様式の採用や、従前のまちなかの伝統的な建築様式、等々、新・旧の建築様式を、それぞれ「遺伝子」として捉え、それによる影響を想定・検討すると良いと考える。そして、具体的には、新たな建築様式を、賛否、つまり A or B という選択からではなく、A & B という“止揚”の立場から考えると良いと思う。(a) 遺伝子、その性格・特徴、伝統性、等々を踏まえて、遺伝子の配列・組換え、攪拌・融合、調整・相補、次世代への継承、等々、“止揚”する為の手段・方法は幅広く考えられよう。(b) 各種の遺伝子の位置を示したものを、遺伝子の専門分野では、「遺伝子地図」と云うが、そうした地図を、都市の中に、如何に構想し、創り、育み、守ることができるかが問われることになると思う。(c) つまり、ここでは、「受容」と「構想」の重要性を、特に指摘し、その上で、混沌を目的にするのではなく、時を経て、次第に「地域化」（次第にその地域に溶け込み、新たな存在となる）するという認識を提示する次第である。これらのことは、「持続」と「発展」の狭間を考えることに、必ずや繋がるものと云えよう。

- ⑥「狭間の計画論」の共有と更なる飛翔：種々の事柄を“分けるのではなく”，“分けずに考え，止揚すること”は，今後の大事な視点・態度であろう。「狭間の計画論」の共有化と，更なる飛翔を，提案する次第である。

以上，最近の「私の考えていること」を，拙い段階ながら，大胆に披露させて頂いた。

これらの論考を通して得られた本成果，それは極めて恥ずかしいレベルのものではあるが，それを，青野先生のご業績を称えつつ，更に，先生のご退職という一つの際を，心から記念致しつつ，青野先生に捧げることにしたい。

[注] (文中：n)

- 1) 研究成果受賞：2009年「都市住宅学会 学会賞・論説賞」受賞：森保。受賞対象論説：「地・学連携型の祝島集落研究とその都市住宅プロジェクトとしての意味」⇒論説の内容：身近な特定地域研究の重視，自然的・物的・社会的な環境の織り成す枠組みの重視，更に，環境共生・持続性，プロジェクトマネジメント，研究プロジェクトの新しいスタイル等々の重視について，特定事例の調査結果を基に論考。
- 2) 研究成果の更なる帰結：各種研究活動を基礎に北京で講演：森保。中国北京社会科学院・北京コミュニティ研究センターの「顧問・終身客員教授」の称号が授与された。
- 3) 参考文献(4)の「土地と住宅の経済分析」の第12章「定期借地権とまちづくり」にて，青野先生は，幾つかの提言を行っている。その中で私は，次の提言を特に注目したい。

- * 定期借地権制度を活用した高齢者向けの賃貸住宅の供給と高齢者への現金給与（提言(c)）
- * 中古住宅市場の整備と育成（提言(d)）
- * 定期借地利用の建物への固定資産税の軽減と建物の建築費用および改修費用への低金利融資（提言(e)の一部）
- * 「定期借地ライブラリー制度」の創設（提言(f)）

これらの提言の根底にある，“生活重視性”，それに向けた“柔軟で堅実な思考”と表現してよいと考える青野先生の発想（眼差し）を，私は高く評価したい。そして，そのような発想からみて，上記にて扱った私の論考，つまり，地域・集落づくりにおいても，開けた発想が期待されるものとする。その一つとして，先に，私は，デザインから求められる

こととして、「路居」の概念を重視・応用し、「スケルトン・インフィル」の原義である「サポート・インフィル」という「建物づくりの概念」を、「住宅地・まちづくりへと応用・展開」することについて、特に検討されて良いものと考え提案した。また、併せて、ここでの論考からは、「路居」、つまり、「練塀通り」に沿った住宅に対して、税法上のインセンティブ（例えば、固定資産税の引き下げへの配慮・ほか）について検討することは、考えられてよい方法と思う。「定期借地権」、「サポート・インフィル」に係る各種の展開、等々の「新しいうねり」については、大事に致したい要因（事項）の一つと考える次第である。

【参考文献】

- (1) 森保洋之：『集住環境の構成原理からみた「社会環境システム」序説 — “祝島集落”事例における物的環境と社会的環境，そのシステムの理解—』2009年度：日本建築学会大会（東北）研究協議会資料集（建築社会システム部門・建築計画部門：寄稿論文）2009.8.
- (2) 森保洋之：『建築と都市，その伝統と近代の狭間を考える …私の研究小史からの眼差し…』中国・北京社会科学院：国際シンポジウム「2008年オリンピックの北京の人文環境に対する影響及び持続可能な発展」（招待講演）2008.10.
- (3) 森保洋之：『山口県・祝島集落研究から考える《新たな公》—序説—』2008年度：日本建築学会研究協議会資料集（農村計画部門：寄稿招聘論文）2008.9.
- (4) 青野勝廣 氏：『土地と住宅の経済分析』清文社 2002.8.
- (5) その他：割愛

（本稿提出日：2009年8月28日）